広告

ニイガタストーリーズ第一話

ダンボールいっぱいに笑顔をつめて

「ほんとにもう」

そう今日一番の大声を出すと、上越市に住む山下知子は、怒りをぶつけるように米袋をぎゅうぎゅうとダンボールに押し込んだ。

その電話がかかってきたのは、今日の午後、夫の剛志と昼食後の一服を楽しんでいた時だった。

「もしもし」

「あ、お母さん？」

新潟市内に住む一人娘の奈緒だ。その声のトーンに嫌な予感がした。案の定、言いにくそうに話し始めた。

「あの…またお米送ってくれない？」

「この前送ったとこでしょうが。あんたんとこの食料自給率はどうなってんのよ」

「それが全部食べちゃったのよ。ほら、うち、育ち盛りが三人もいるから」

「だったら自分で買えばいいじゃない？そっちにだってお米ぐらい売ってるでしょ」

「お米だけは、うちのじゃないとだめなんだよね。ほら、うちのお米、おいしいし。なんて言うのかな、甘みが違う？」

「あんたはもう。わかったわ。すぐ送るから」

「お母さん、いつもありがとう。本当に助かります」

大きくため息をつきながら、スマホを切った。すると、そわそわと聞き耳を立てていた剛志が語りかけてきた。

「今の奈緒か？だったら新米送ってやらなくちゃな」

軽やかな足取りで納屋に向かう剛志の後ろ姿にまたため息が出た。

奈緒が大学進学のために家を出たのは、もう二十年も前のことだ。新潟市内の学生マンションで暮らしはじめた娘に、はじめての一人暮らしはなにかと心細かろうと、あれこれ世話を焼いては、「ごはんぐらいはちゃんと食べなきゃダメよ」と剛志がつくった米を何かにつけ送るのが、いつしか我が家の習慣になった。それは、保険会社の新潟支社で働きだしてからも、同僚の紹介で知り合った一紀さんとの入籍を事後報告にきてからも、三人のわんぱく坊主―井上家のラグビー三兄弟として有名らしい―に恵まれてからも変わることはなかった。

「いつまでもあると思うな親と金」

その語気に合わせて、新聞紙にくるんだナスをダンボールに詰め込んだ。奈緒は昔から親に甘えるのがなによりも得意なところがあって、微妙に半音上げた甘えた声でおねだりしてくると、こちらの怒る気を失せさせるという特殊な力を持っているのだ。そして、「しょうがないわね」という声を聞いていたずらっぽく笑う、あの笑顔になぜか許してしまうのだ。

「もう、わたしも62ですからね」

そのくせ、この頃は、何かと理由をつけては、実家に寄り付かなくなった。なんでも長い休みは子どもたちに今しかできない体験をさせたいんだとか。

自家製の梅干しを汁がこぼれないようにビニール袋に入れていると、

「みかん、いるかなあ？」

と剛志がみかんを両手に現れた。

「いるわよ。勇太が好きだもん。あとは…奥田屋のぬれせんか。一紀さんが好きなのよね」

そう言いながら、戸棚を開ける足取りはいつものように軽やかになっていた。

「楽しそうだな」

「楽しかないわよ」

そう、知子は知っているのだ。米が届くと、スマホの画面越しに奈緒と彼女の血を色濃く受け継いだ孫たちが、あのいたずらっぽい笑顔を届けてくれるのを。そして、あの笑顔を自分がなによりも楽しみにしていることを。だから知子も詰めるのだ。とびきりの笑顔をダンボールに。ああ、娘の家の食料自給率は、まだまだ増えそうにないわね。

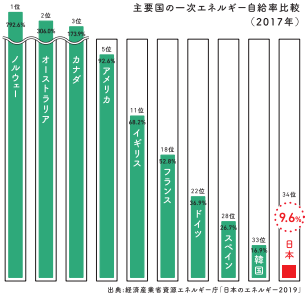
※登場する人物・団体・名称等は架空のものです。

こんなしあわせな自給率の話ならいいですが、今、日本本問題になっている自給率の話があるんです。それは、エネルギー自給率の話。日本は、電気などの元となるエネルギー資源の自給率が、先進35カ国中34位のたった9.6％しかないんです。現在、日本の電力の約80％を火力発電に頼っています。しかも、この火力発電の燃料となる原油の約88％が政情の不安定な中東から輸入されています。だから、万が一、輸入がストップしてしまったら、日本の電力の大半が足りなくなってしまう可能性があるのです。

私たち東京電力は、この課題に対し、風力発電など再生可能エネルギーの主力電源化を目指すとともに、再生可能エネルギー、火力発電、安全を大前提に原子力発電など、エネルギーをバランスよく組み合わせる、エネルギーミックスを推進することで問題解決を目指しています。

みなさまの、かけがえのない、その毎日のために。

主要国の一次エネルギー自給率比較
（2017年）



出典：経済産業省資源エネルギー庁「日本のエネルギー2019」

TEPCO

お問い合わせ

東京電力ホールディングス新潟本社
〒950-0965　新潟市中央区新光町11番地7 新潟光ビル

025-283-7461
9:00～17:00（土日・祝日・年末年始除く）